

であり、訓練をしない軍隊というのは、腹を痛でするあると意えたのである。いとという時に没意味なくして意味がなく、そのために、非難はいつも、訓練に動むはずのものである。遠く相手を相手が、自衛隊です、というのだ。

あるいは、個人として現様に誇り高いマフガン・スタンのゲリウラたちのこと、訓練とはいえず、集団のなかに埋没させられてしまうのは耐えられない、ということかも知れない。試射はするけど、訓練はしない——それか、マフガン・ゲリウラの姿であった。

それならばと思つて、その時間には、わたしは空手を教え始めたとしても、不思議ではない。午後四時頃が、わたしの空手道場の開門時間となったのである。

ファン・ツツ、ワン・ツツ！

げんこつのことと性んで、もう一つ響かされたのは、彼らの体の固さである。

彼らは、歩いたり走ったりすることは、こちらが舌を巻くほどに速くて、クフである。なにしろ、山野を駆け巡るのが平地の如くで、攻撃に出掛ける際など、わたしが息をフリーツツさせながら、必死の思いで山を登って、彼らに連れまいとしている時に、彼らは呼吸を微いながら、とんとん足を打つのである。「いったい、どんな心臓をしているのだ」と、腹立たしくなるくらいだ。

夜更しや、なとというときは、こゝろくたたり神の心である、長時間も早く、教を

攻撃し、そのあとまた、何時にも歩いづつてくる、それも、なとという心だ。

そうした、歩く、走る、登る——といった基本的な動作はきわめて速者ながら、いかにせん、彼らの体の固さはどうしようもない。まず、まともに、体が曲がらない。

「割ってみろ」といっても、膝が曲がらず、尻の隙りと隣じまつに、膝を伸ばしたままモンと蹴るだけである。蹴力が、まるで感ぜられない。

それに、リズム感も随分と欠ける。

動作が、ばらばらだ。

マフガンの空手も、



つまり、空手などというものは、およそ掛け離れたシロモノからの出発である。まったく、カラテの力の字も知らない連中に教えるのだから、まあ、やむをえないといえ、それにしては日本人に教える場合は、もう少ししてある。教習人ですら、これほどひどくはない。

どうして、マフガン人はこんなにもチゲヘゲなのか、早く、走る、登るといった基本動